

高齢者ケアにおける回想法応用に関する研究の動向と アメリカにおける一研究の紹介

木下 香織 古城 幸子 真壁 幸子

老年看護学

A Review of Studies about Application of Reminiscence on Caring for The Elderly
And an Introduction of a Study in America.

Kaori KINOSHITA Sachiko KOJO Sachiko MAKABE

(2001年11月1日受理)

老年期の回想 (Reminiscence) は、“過去への繰言” とか “現実からの逃避” などと否定的に受け止められることも多い。しかし、1960年代にアメリカの精神科医 Butler, R. N.によって、死が近づいてくることにより自然に起こる心理的過程であり、また過去の未解決の問題を再度とらえ直すことなど、積極的な役割ももつものであると提唱されて以来、欧米を中心に高齢者の関わる保健・医療・福祉分野で広汎な展開をみせている。本研究では、わが国の高齢者の回想をケアに応用した研究の流れを概観する。次に、ライフレビューの活用について末期患者を対象に述べた海外文献を用いて、回想の具体的な方法を紹介し、わが国での活用の可能性と応用を考察した。

はじめに

ライフコースや主観的幸福感に関する社会学的知見の蓄積を、実践的な学問である看護学の中で具現化するために、筆者らはライフコース研究会を発足し、文献抄読や予備的調査研究を行ない、2年目を迎えた。既に、ライフコースや主観的幸福感に関する多くの文献の基本的文献として引用されている代表的な研究論文の概観をまとめ¹⁾、予備的調査として2事例へのインタビューを行なった²⁾。

今回の主題である老年期の回想 (Reminiscence) は、“過去への繰言” とか “現実からの逃避” などと否定的に受け止められることも多い。しかし、アメリカの精神科医 Butler,

R. N.は老年期の回想を、死が近づいてくることにより自然に起こる心理的過程であり、また過去の未解決の問題を再度とらえ直すことなど、積極的な役割ももつものであると提唱した。以来、欧米を中心に高齢者に関わる保健・医療・福祉分野で広汎な展開をみせている³⁾。本研究では、わが国の高齢者の回想をケアに応用した研究の流れを概観する。次に、ライフレビューの活用について末期患者を対象に述べた海外文献を翻訳し、わが国での活用の可能性と応用を考察する。

1. 高齢者ケアにおける回想法応用に関する先行研究

Butler, R. N. (1963)⁴⁾は、「死が近づいてくると

いう意識」が人生を回顧させ、回想者が自分自身を受け入れるように促し、穏やかな思いに至らせるという回想の肯定的な側面と、落胆や失望をもたらす否定的側面を指摘した。彼が老年期の回想や人生回顧 (life review) を高齢者の臨床場面に位置づけて以来、実証的な研究や実践例が蓄積されてきた。

回想をケアに位置づけての実践の報告には2つの流れがある。ひとつは1990年以前のもので、脳神経系疾患の後遺症である意識障害のある患者に対する看護実践のなかで導き出された経験的なアプローチとして報告されている。川島みどり (1985)⁵は、患者の健康時の生活習慣やその人生の中で体験された出来事などが有効な刺激となって患者の回復過程に影響することなどを報告し、有効刺激の情報収集や観察が必要だと提言している。筆者 (古城幸子)⁶も意識障害患者に対して、その人の人間像を豊かに描かせるような、その人自身の過去の生活体験をケアに活かせると報告した。清水洋子 (1990)⁷は、特別養護老人ホームの夜間せん妄のある老人に、過去の生きがいの記憶につながる快的刺激因子を見つけ、意識的にそれをケアに投入し、安定的な自己意識を回復させることができたことを報告している。川島 (1985)⁸は、これらのアプローチを「意識的条件付け」と名づけた。

わが国の高齢者の回想についての実証的研究としては、長田・長田 (1994)⁹が、回想の量と過去・現在・未来についての満足度や回想の効果に関する質問紙による量的研究を報告している。それによれば、よく回想する高齢者は現在満足度が低く、死の不安が強い傾向にあるが、回想によって「気分転換」や「重荷から開放される」感じを味わっている。

回想のもうひとつの流れは、痴呆性老人の場所、時間、人などの見当識障害を改善するために、言語を中心に反復学習が展開される「リアリティ・オリエンテーション (Reality Orientation、以下 RO と略す) における回想の利用である。わが国では1990年代に入って、社会学領域から看護・介護領域に紹介された。その大きな役割を担ったのが野村豊子の一連の報告である。

野村 (1990)¹⁰は、「クラスルーム RO」という痴呆性老人のグループワークの形態で、家族、子ども時代の遊びなどをテーマに回想を利用し、対人交流などの行動変容の効果を報告している。さらに痴呆性老人を対象にしたグループ回想法の実践においても、治療的なアプローチとを併せて効果をあげている (野村、1993a¹¹、1993b¹²)。新井礼子・後藤美恵子 (1993)¹³も痴呆性老人に対して回想法を取り入れたグループワークを試み、非言語的なかかわりがコミュニケーションや信頼関係促進に有効に働く可能性を示唆している。川島 (1994)¹⁴は、ROを紹介した翻訳書『痴呆性老人のアセスメントとケア』(U. P. Holden, & R. T. Woods, 1982)の後書きで、彼女が名づけた「意図的条件づけ」との共通性を指摘している。

野村豊子・黒川由紀子 (1992)¹⁵の著書『回想法への招待』には回想法の基本的な方法論が詳細に記述されている。さらに野村 (1992)¹⁶は特別養護老人ホームの入居者にも応用して、彼らの仲間関係づくりや情緒的安定を目的にグループ回想法を試み、回を重ねるなかで物語回想から再評価回想へ、否定的回想から肯定的回想へと参加者の回想内容が変化すると報告している。

野村 (1996)¹⁷は、痴呆性老人のグループ回想法の効果として、高齢者自身への効果のほかに、職員や家族への効果 (一人一人の高齢者の生活史や生き方への敬意の深まり、そこで得られた情報の解釈の日常のケアへの利用、日常では見られない高齢者の姿の発見、家族の歴史の確認など) をあげている。また、回想をケアに位置づける考え方を貫いている価値観として Bornat の見解 (最大限の自己決定の尊重、エンパワメント、個別性の尊重、社会参加) に、さらに「ケアされるものから見る視点」と「生活全体の継続性の確立」を付け加えている。

Butler, R. N. (1963)¹⁸は、回想とライフレビューは同義ではなく、前者は後者に含まれているとしたが、明確な定義は確立しておらず、1980年代後半までは回想とライフレビューは特に区別されずに用いられていた¹⁹。Haight (1995)²⁰は、Erikson の自我発達段階説を反映させて Life Review and Experience Form (LREF) を用いる構造的ライフ

レビューモデルを提唱した。

野村 (1998)²⁴⁾は、回想法とライフレビューの対象と方法についての枠組みを考案し、8つの具体的な方法を示している。回想法についての先行研究では、前述のように、一般的回想を用いて痴呆性高齢者のグループへの実践の報告がその多くを占めていた。しかし、近年では個人を対象とした実践報告もされてきている²²⁾²³⁾²⁴⁾²⁵⁾²⁶⁾。

II. ライフレビューを活用した海外文献の検討

今回、検討の対象としたのは、ライフレビューを終末期患者に用いるさまざまな形態を示した Pickrel (1989)²⁷⁾による研究である。Butler が回想法の対象を高齢者としたのに対して、Pickrel はすべての年代の人々に効果的な技法であると主張している。ライフレビューの効果として、終末期の人々が残されたその人生のなかで次に何を成し遂げたいのかというゴールを設定する過程において役立つ。死期が近づいていることを知覚することによりライフレビューの過程を刺激し、過去に成し遂げたことや肯定的なできごとを確認することを可能にする。そして、その結果は患者の自尊感情の強化に重大な意味を持つと述べている。Pickrel は、ライフレビューの対象についてはあらゆる世代の終末期患者としているが、方法として個人かグループかについては明言していない。しかし、後に紹介する形態の多くは個人に行われることにより、より効果を高めるのではないかと考えられる。

Pickrel は、ライフレビューの形態について、5つのカテゴリーに分類している。以下では、各カテゴリーに示された諸方法を紹介し、文化や習慣の異なるわが国での諸方法の活用の可能性と応用について考察する。

1. Structured Activities : 構造化された活動

このカテゴリーでは、Oral history 口述史、Interview 面接、Autobiography 自叙伝、Family tree 家系図、Genogram ジェノグラム (家系図、過去帳)、Life line 人生線と Peaks and valleys line 絶頂

と谷間の線を紹介している。

Oral history、Interview、Autobiography はいずれも、個人の人生での出来事や経験を第三者の介入によって振り返る方法である。

Life line とは、個人が誕生から死までの期間を表すための長い線を描き、その線に沿って、その個人の人生において重要な日付や出来事を記す方法である。Peaks and valleys line は、個人がよき日々とあまりよくなかった日々、あるいは幸せな出来事とそうでなかったことを思い出し、上昇や下降させて線を描く方法である。この2つの方法も、個人を対象にした方法である。Family tree とは、個人の家系図をたどる活動である。Genogram は家族の構造を表した図である。我が国の家系図に類似するが、名前や日付を含むため、家族の歴史についての基本的な情報となる。Family tree、Genogram は、どちらも家族の歴史を通して個人の歴史を知る方法である。

Pickrel は、成人に広く用いられるこれらの方法が、なぜ子ども、特に10代の若者に用いられないのかと問いを投げかけている。

考察：Oral history、Interview、Autobiography に示される個人の人生での出来事や経験を振り返る方法は、主として個人的な活動であることが多い。Pickrel は Interview の項で、「聴くことは、私たちが誰か他の人にあげることのできる貴重な贈り物である」と述べている。第三者の介入によって回想は促進されるのであり、“聞く存在”が重要となる。個人を対象にした方法はわが国でも行なわれているが、個人の能動的な活動であることが多いであろう。第三者の介入によって「回想」として行なわれることが重要な点である。

また、Autobiography の項では、「完全な自叙伝は分かち合うことを必要としない。書き手が遺したいものの一部として遺すことを望む部分のみ、あるいは書き手が家族に思い出として持っていてほしいと願う重要な個人のメッセージとして」と述べている。人生すべてを振り返る必要はない。また、個人にとって好ましくない経験 (至低体験) でも、その経験を振り返ることによって克服体験の意味と生きる力を引き出す作業になる²⁸⁾と筆者らも考えている。

Family tree、Genogramについては、わが国においても先祖代々の家系図を残す家庭もあるが、必ずしもどの家庭にも残されているものではない。個人の両親や兄弟姉妹、祖父母、子どもや孫、配偶者とその縁者と、個人の思い出せる範囲であっても、「過去・現在・未来のより広い一族の部分としての自分自身を知覚する」ことは可能であろう。

わが国での活用については、文化的背景による困難さは感じられないが、話題となる事象が理解できるよう、聞き手は時代的背景を熟知しておく必要がある。

2. Family Activities：家族活動

このカテゴリーでは、Family pictures, correspondence, and other memorabilia 家族写真、通信、そしてその他の注目すべき出来事の記録、Family story time 家族物語の時間、Family, school, or neighborhood reunion 家族、学校、あるいは近隣の人との再会の集い、Pilgrimage 巡礼、Asking for advice 忠告をを求めることを紹介している。これらの活動は家族メンバーの小グループで用いることが勧められている。

Family pictures, correspondence, and other memorabilia とは、家族の写真や通信、その他の注目すべき出来事の記録などの「家族の宝物」を調べることである。Family story time とは、3世代あるいはそれ以上の家族メンバーを招き、家族の物語を分かち合うことである。Family, school, or neighborhood reunion とは、家族、学校、あるいは近隣の人など、個人にとって重要な人々との再会の集いである。Pilgrimage とは、個人の生誕の地や学校、古い隣人などの重要な場所へ連れて行くことである。Asking for advice とは、個人に家族の問題について意見を求めることである。このカテゴリーで紹介された方法はいずれも、家族や古い知人との交流によって個人が周囲の人々とのように関係を築いてきたのかを、個人のみならず家族もが振り返ることができる方法である。

Pickrel は、これらの活動に参加したあとの家族がその経験で学んだことを振り返り、活かしていけるよう導く役割がケア提供者に求められると

述べている。

考察：異なる時代背景を生きる世代にとって、個人の背景を理解することは容易ではないかもしれない。しかし、写真や人物などの視覚的な効果により、世代の離れた家族間の理解を容易にし深める効果が期待できるであろう。

Pickrel は、これらの方法によって「個人がいかにして過去や現在とうまく溶け込んできたかを悟る」「一体感を助長することができる」と述べている。個人が周囲との関係を振り返るとともに、家族が個人の理解を深める機会になり、相互の理解が一致することによって個人と家族の関係性を強める機会となり得るであろう。

わが国での活用は、個人を対象にした写真や文集などのケアへの活用は日常的によく使われていることだが、家族を単位とした試みはみられない。在宅ケア時には活用が容易であろうし、また、施設ケアにおいては家族の面会時を使った回想法の応用が考えられる。Structured Activities と同様に、聞き手の時代的背景の熟知が不可欠である。

3. Anecdotes：逸話

このカテゴリーでは、Story telling 物語ること、Discussions of career or life's work 経歴やライフワークについて話し合うこと、Where were you when? ～したときにはどこで…、Styles 様式、When you were a child / teenager… 幼児期や10代の頃には…、This is your life これがあなたの人生という方法を紹介している。

Story telling とは、学校時代のことや料理や運転を習ったことなど、個人が過去の経験について話すことである。Discussions of career or life's work とは、個人の経歴について話し合うことである。家族を持たない個人にとって、自己の独自性を示す仕事について話すことが彼らの人生を意味あるものにしてきたかを理解する手助けとなる。Where were you when? とは、重大な歴史的出来事や重要な家族の出来事のときの個人の様子について尋ねることである。Styles とはそのときの服装について、When you were a child / teenager とは、隠れ場所や遊びなど幼児期や10代の頃のお気に入り

りについて尋ねることである。This is your life では、ホームビデオや視聴覚制作によって家族メンバーにとって幸せな思い出を作り出すことを紹介している。

Pickrel は「これらは家族にまつわる事実であり、もし他の家族のメンバーと分かち合わなければ失われるであろう、貴重な物語である」と、Family Activities と同様、周囲の人々との関係性を強める機会であると述べている。

考察：1つめのカテゴリー Structured Activities では、完全性を求めないながらも個人の人生全体を振り返る活動である。対して、このカテゴリーでは、時間や場所、服装など個人的で詳細な事柄に触れて、過去を振り返る活動である。

この作業は多くの場合、ケア場面での何気ない会話の中にその取っ掛りが見える。子供のころ父にしかられたこと、女学校のときの姿勢のこと、終戦後の長崎に船で着いたときのこと、結婚式で初めて夫の顔を見たこと、それらのとぎれとぎれの逸話を高齢者の重要な出来事として記録し、家族との共有する思い出としてケアの中に位置づけることができる。これらの作業を通してケア提供者は、その時代を想像し追体験できるように感性を開いておく必要がある。

4. Mind Travel：回想旅行

このカテゴリーでは、I always wanted to…私はずっと～したかった、If もしかしたら、Relive an experience 経 験 を 追 体 験 す る こ と、Imagery 心 像、Reflections using nature 自然を用いながらの回想という方法を紹介している。

I always wanted to…とは、実現しなかった夢について、実現を阻んだ理由を尋ねたり、空想の世界で実現するよう手助けすることである。If とは、「もしも願いが3つ叶えられるとしたら何が一番？」と尋ねることによって、個人にとって今何が最も重要なことなのかを知ることである。そして、成し遂げられなかったことが空想の中で実現する手助けをすることにもつながる。Relive an experience とは、楽しかったこと、ギョッとしたことあるいは異なる結果を望んでいたことなどを追体験することである。特に、異なる結果を望ん

でいたことについては、何によって結果を変えられるか詳しく調べるように勧めている。Imagery とは、五感のすべてを使って患者がその心に描くものを想像することであり、過去の経験を追体験することにもつながる方法である。Reflections using nature とは、葉っぱや花などの小さな自然のものを用いて、それらが心にもたらす物語を尋ねることである。たとえばクローバーの葉を用いることで、その緑色を理由に成長の象徴とするかもしれないし、3つの葉が身体的、精神的、そして霊（魂）的な人生の構成要素を表すというかもしれないといったようにである。

Pickrel は、「彼らの思うところのいかなるところへも『旅する』ことができる」と述べ、寝たきりの患者たちにも用いることができると紹介している。

考察：これらの方法は、死期が迫った寝たきりの患者も含めて活用が可能であると紹介されているが、老化現象や疾病に関係するさまざまな障害によって活動が制限される高齢者にとっても有効な方法であろう。

Pickrel は I always wanted to…の項で、「時には、傾聴したり、質問をしたり、夢の重要性を認める誰かがいることが解決や満足感を成し遂げるために十分なこともある」と述べている。実現できなかった夢を第三者に語りながら、経験していた当時では気づかなかった原因が解明されたり、実現できずとも自己の努力を振り返って満足に感じられたりすることもあるだろう。Relive an experience の項で「ケア提供者は昔の間違いを訂正するために用いることができる手段を提案してもよい」と述べているように、Structured Activities と同様、“聞く存在”が重要だと考えられる。

そして、ケアへの応用として、高齢者個々の日常の中で感じている感情へ焦点があたるような個別性が重要である。食事に問題がある方へ「今何でも食べられるとしたら何が食べたいか、3つ挙げてみてください」という答えに、今の状態で可能な調理法を工夫することもできる。「どこでも行けるとしたら…」という問いで、その場所に関連のある人に訪問してもらうことも試みることができるだろう。

5. Arts and Crafts : 芸術や技術

このカテゴリーでは、Favorite book, story, or movie お気に入りの本・物語・あるいは映画、Music and songs 音楽や歌、Dance or creative movements 踊りあるいは創造的な動き、Collage コラージュ、Drawing スケッチ・線画、Monument 記念碑、Family Shield 家族の盾、Personal Shield 個人の盾、Quilt or needlework キルトあるいは刺繍、Poetry, stories 詩・物語、Journal writing 日記を書くこと、Journal reading 日記を読むことという方法を紹介している。

Favorite book, story, or movie では、お気に入りの本、物語、あるいは映画を題材に、それらが個人にとって持つ意味などについて尋ねる。Music and songs では、音楽や歌に関係する思い出を分かち合うことを紹介している。Dance or creative movements とは、全身を使って出来事に関する感情を表現する方法であり、特に幼い子どもたちはこの方法による表現を楽しむと紹介している。Collage とは、大きな一枚の紙を雑誌の写真で覆い、個人の人生の物語を表現する方法である。Drawing とは、過去、現在そして未来の家族や個人の活動などについて個人に描かせる方法である。Monument では、「もしもあなたの故郷の町が、あなたに敬意を表して記念碑を建てるとしたら、あなたは何を望みますか?」と問うている。Family Shield、Personal Shield とは、家族あるいは個人の盾をデザインすることである。家族の盾では“座右の銘”、“ふるさとの市や町”、“国家的な起源”、“職業”、“自由時間の活動”がその要素となる(図1)。個人の盾の要素は“座右の銘”、“最も偉大な業績”、“成人期”、“青年期”、“子どもの頃”である(図2)。Quilt or needlework とは、個人や家族の思い出をキルトやその他の刺繍

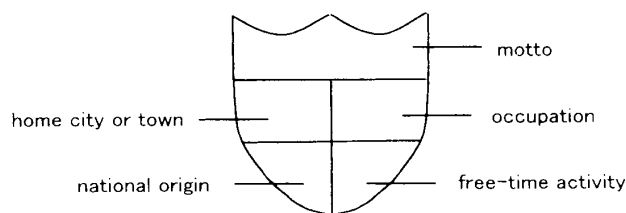


図1. Family Shield

の中に縫って、デザインを創りあげることである。そのほか、詩や物語を書いたり、日記を書いたり読んだりする Poetry and stories、Journal writing、Journal reading を紹介している。

Pickrel はこれらの方法について、言葉によるコミュニケーションをとれない患者にとって、「より『創造的』な方法」であり、子どもたちや若者はとくにこれらの分かち合いの方法を好むと述べている。

考察：これらの方法が言葉によるコミュニケーションをとれない患者に有効な方法であると紹介されているが、能動的に語られない高齢者にとっても、さまざまな手段を用いて回想を促進する効果があると考えられる。また、特別な道具を必要としないため、作業療法として日常のケアに用いながら、回想を促進し、個人の理解を深めることができるであろう。

Family Shield や Personal Shield の方法については、文化的背景の相違から、わが国での活用には困難が予想される。Family Shield に関連して家紋が想起される。しかし、家紋は「家々によって一定した紋所」(広辞苑)であるが、あくまで伝統として継承されるものであり、新たにデザインされるものではないし、その一族固有のものとは限らない。わが国で応用するにあたっては、“国家的な起源”“自由時間の活動”などの要素については文化・風土的に適しているとはいえ、検討の必要性があろう。また、個人についてデザインする Personal Shield に相当する事象も、わが国に

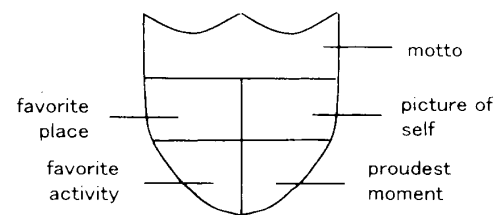
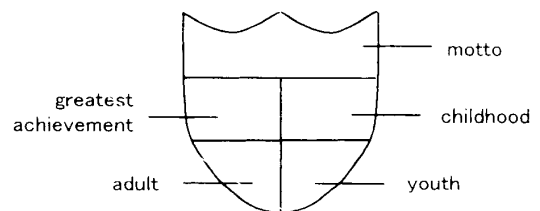


図2. Personal Shield

は存在しない。

6. 対象としての終末期患者と高齢者について

本研究で引用した Pickrel の論文は、終末期患者への回想法の活用を述べたものである。一つ一つの方法に考察を加えた結果、高齢者にとっても有効な諸方法が紹介されているといえる。

考察では、「ライフレビューにおいて忘れないでおきたい重要なことは、過去は今日にとってのその意味を証明するために調べられるということである」「多くの人々は彼らの人生の否定的な側面を強調して、肯定的な側面を見落とす。グラスの満たされた半分を見ないで空っぽの半分に焦点をあてるように」「ライフレビューはそれとは異なる成功という結果に導くことができる。それは人生の完了において、古い過ちを訂正すること、失った友人と仲直りすること、家庭における傷を癒すこと、そして、個人・家族の誇りを認めることである」「家族がライフレビューの過程の分かち合いに参加するとき、それは親密さを増すことにつなげることができる」と、高齢者を対象とする場合と共通する回想の効果を述べている。

また、「ライフレビューはたいてい肯定的な結果をもたらすが、一方、彼あるいは彼女自身を落第者として見ている人にとっては、実に痛みを伴うことにもなりうる」と述べた、回想を行なう上での注意点も共通している。

おわりに

回想法についてわが国では、1990年代から本格的な研究がなされ、この10数年は試行錯誤を重ねてきたといえる。先駆的に回想法を活用する海外での報告から学ぶことも必要であろう。今回の研究を通じて、回想法を展開する上での、より具体的な方法を提示することができた。今後は、これらの方法を実践したうでの検討を重ねていくことが必要である。

謝 辞

本研究を纏めるにあたり、英文抄読についてご指導をいただいた、本学看護学科宇野文夫教授、

教養科山内圭助教授に深謝いたします。

引用文献・参考文献

- 1) 上田幸子他：高齢者のライフコースおよび幸福感に関する研究の動向，新見公立短期大学紀要，21，2000，pp.129-136.
- 2) 上田幸子，木下香織：高齢者理解のための回想法の試み-Haightの構造的ライフレビューを参考に-，日本老年看護学会第5回学術集会抄録集，2000，p.81.
- 3) 野村豊子：回想法とライフレビュー，中央法規出版，東京，1998，p.2.
- 4) Burler, R. N.: The Life Review, An Interpretation of Reminiscence in the Aged, *Psychiatry*, 26, 1963, pp.65-75.
- 5) 川島みどり：意識的な条件づけが過去の生活習慣や生活の記憶を再生した例から，日本看護科学学会誌，15(2)，1985，pp.12-15.
- 6) 古城幸子：患者の人間像を豊かにイメージしたい，看護学雑誌，43(9)，1979，pp.915-920.
- 7) 清水洋子：痴呆および夜間せん妄等のある老齢の脳血管性精神障害患者への“意識的条件づけ”による看護的アプローチ，臨床看護研究の進歩 Vol.2，1990，pp.106-112.
- 8) 前掲5)
- 9) 長田由紀子，長田久雄：高齢者の回想と適応に関する研究，発達心理学研究，5(1)，1994，pp.1-10.
- 10) 野村豊子：特別養護老人ホーム入居の痴呆老人を対象としたROグループの試みと効果，老年社会学，32，1990，pp.62-72.
- 11) 野村豊子：痴呆老人の心理的・社会的アプローチ，OTジャーナル，27(9)，1993a，pp.685-693.
- 12) 野村豊子：回想法について，総合ケア，3(2)，1993b，pp.26-31.
- 13) 新井礼子，後藤恵美子：痴呆性老人への回想法グループの研究，総合ケア，3(8)，1993，pp.58-60.
- 14) Holden, U. P., Woods, R. T. (川島みどり訳)：痴呆性老人のアセスメントとケア，医学書院，東京，1994.
- 15) 野村豊子，黒川由紀子：回想法への招待，筒井書房，東京，1992.
- 16) 野村豊子：回想法グループの実際と展開，老年社

- 会学, 35, 1992, pp.32-46.
- 17) 野村豊子：痴呆性高齢者への回想法－グループ回想法の効果と意義, 看護研究, 29(3), 1996, pp.225-242.
- 18) 前掲4)
- 19) 前掲3) p10.
- 20) Haight, B. K., Coleman, P. G., and Lord, K: The Linchpins of a Successful Life Review: Structure, Evaluation, and Individuality. Haight, B. K., and Webster, J. D. eds., The Art and Science of Reminiscing: Theory, Research, Methods, and Applications, Taylor & Francis, 1995, pp.179-192.
- 21) 前掲3) pp.7-16.
- 22) 古城幸子, 石橋由美：回想で語られる老人の自尊心感情とそのケアへの適用の可能性, 臨床看護研究, 3(1), 1996, pp.38-54.
- 23) 古城幸子, 石橋由美：回想を語ること・聞くことの高齢者ケアにおける意味, 臨床看護研究の進歩, Vol.9, 1997, pp.19-25.
- 24) 小田島朗子：ターミナルケアにおける回想法, 看護管理 Vol.8 No.12, 1998, pp.966-970.
- 25) 松田ひとみ：看護の対象理解に活用するライフレビューと回想法, 臨床老年看護 Vol.6 No.4, 1999, pp.133-141.
- 26) 河津芳子：看護学とライフヒストリー, 看護学雑誌65(7), 2001, pp.629-636.
- 27) Pickrel, J.: "TELL ME YOUR 'STORY": USING LIFE REVIEW IN COUNSELING THE TERMINAL ILL, Death Studies, 13, 1989, pp.127-135.
- 28) 前掲22)